

言語使用のメタ認知的内省の情報資源としてのインターネット： 前提条件再構築の検討を例としてⁱ

Internet Considered as Information Resource of Meta-Cognitive Reflections on Language Use: Reconstructing Presupposition

首藤佐智子, 原田康也
Sachiko Shudo, Yasunari Harada

早稲田大学法学学術院
Faculty of Law, Waseda University
shudo@waseda.jp, harada@waseda.jp

Abstract

In this article, we describe how blogs and BBS writings on the Internet can be utilized as windows onto the inter-subjectivity of native speakers' meta-cognitive judgments on (non-)proper usages of presupposition-triggers.

Keywords — presupposition, manipulation, Internet, meta-cognitive reflections

1. はじめに

大規模言語資源としてのインターネットをコーパス言語学的な分析手法で解析するさまざまな技術・手法が提案されているが、本稿では一般的な日本語母語話者の日本語に対するメタ認知的内省を観察する資料として活用する方法について検討する。言語使用に関する間主観性を分析する手法の一例として、前提操作に関わる「問題な日本語」に対するブログなどに見られる「感想」や「コメント」を母語話者のメタ認知的内省を反映するデータとして扱った研究の一部を紹介しながら、アプローチの検討を試みる。ⁱⁱ

2. 問題表現と前提操作

言語形式には、使用に際して発話時点のコンテキストに制約を課すものがある。この制約は「前提」と見なされ、そのような言語形式を含む文が伝達する意味の一部となる。このような前提を引き出す言語形式（以下「前提導入表現」）はコンテキストが前提条件を満たさない場合にも使用されることがある。Lewis (1975) は、このような状況において聞き手がコンテキストに前提とされた情報を付け加えるという「前提のための調整」(accommodation for presupposition)を行うとした。Lewis は、調整は「ある程度の範囲」で起こる

とのみ限定しているが、その範囲や調整を意図した前提の操作に関する研究はこれまでできてきていない。前提導入表現を使用する際にコンテキストに課される制約が、母語話者に共有されている根拠は明らかでなく、使用者が「前提操作」を意図して使用しているかどうかは検証できない。したがって、本稿では使用者が前提を操作することを意図せず、異なる前提条件に則って前提導入表現を使用している場合を含めて、前提操作と呼ぶ。ⁱⁱⁱ

前提操作は日常生活で頻繁に行われているが、その使用における意図や聞き手に与える印象などの検証は言語学的研究として成立しにくい。Brown & Levinson (1998) は前提操作をポライトネス方略の一つとして位置づけたが、同様の表現の新使用法に対して聞き手が否定的な反応を示すことは、アンケート調査にもとづく分析(文化庁文化庁 1998)などで示されてきた。これらの先行研究の問題点は、Labov (1966) が「観察者のパラドックス」(observer's paradox)として指摘したように、調査対象が実際の言語運用とは異なる見解を示す可能性を孕むという点である。インターネット上に散在する母語話者の感想や意見は、前提操作を伴う言語使用に対する聞き手のメタ認知的内省を自主的に提供しているという点において、観察者の存在の関与を抑えている。

3. データ例と前提再構築への活用例

Google の検索エンジンで「よろしかったでしょうか」をキーワードに検索を行うと 300,000~500,000 件程度のサイトが抽出され、上位 100 件のうちの約 8 割が非専門家による同表現の近年の使用法に対する否

定的なコメントである。^{iv} その大半は、同表現に関して、容認できる使用法と容認できない使用法があることに言及し、後者の「問題点」について詳述する。例えば、以下のようなコメントである。

(1) よくコンビニなどで私は何も言っていないのに... お箸でよろしかったでしょうか?」とか聞かれますが、「よろしかったでしょうか?」という問いが納得できません。例えば、私が「箸をお願いします」と言った後に改めて「お箸でよろしかったでしょうか?」と聞かれるのは納得できます。でもなにも言っていないのに「よろしかったでしょうか?」と過去の事を問う言い方はおかしいような気がします。<<http://oshiete1.goo.ne.jp/qa/1488726.html>> (2009年2月20日)(下線は筆者)

(2) 最近ファミリーレストラン等に行きますと、メニューをオーダーした後の確認で「○○セット、○○○セット、以上でよろしかったでしょうか?」と過去形にされてしまう点、オイラは気になります... まあ、オーダーの発言をした直後とはいえ、時系列的には過去といわれれば過去の発言ではある... ので多少は納得できます。<<http://www.yuttari.net/diarypro/archives/985.html>> (2009年2月25日)(下線は筆者)

「よろしかったでしょうか」の前提として「発話以前の段階で、聞き手 H が x を欲とするとする判断が、H によってなされ、話し手 S に認識されている」という条件があるとすると、(1)の記述はこの前提が逸脱されていることを問題としていることを示す。しかしながら、この条件は(2)の記述を説明しない。(2)において問題とされる現象を説明するには、「H による前段階判断が、発話の時点において H の意向に一致していることを S が H に確認する必要があると無理なく想定することができる」という条件を想定し、(2)ではこの前提が逸脱されているとみなすことで整合的な説明ができる。^v

4. 結び

ネット上の母語話者の言説としては、ある言い方を「おかしい」と感じることは、言語形式の新使用法が「正しくない」という規範的な論点につながりがちであるが、これを言語形式の制約を反映した母語話者のメタ認知を表明するものと捉えれば、制約を再構築する上で容認されるコンテキストと容認されないコンテキストの判別に関わる主観的判断を提供するデータと

みなすことができる。このようなデータは、データとして採択するか否かの判断が難しく、その判断自体に分析者の主観が反映されてしまうという点で今後解決しなければいけない方法論上の課題を内包しているが、分析者個人の主観や、文脈から独立した表現の使用の容認度から前提条件を構築するという現行の欠点を補うという意味では、貴重なデータを供給するものといえよう。

参考文献

- [1] Brown, Penelope and Stephen Levinson. 1987. *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge: Cambridge University Press.
- [2] 文化庁文化部. 1998. 国語に関する世論調査. 東京: 国立印刷局.
- [3] Labov, William. 1966. *The Social Stratification of English in New York City*. Washington, DC: Center for Applied Linguistics.
- [4] Lewis, David. 1979. Scorekeeping in a Language Game, *Journal of Philosophical Logic* 8.
- [5] 首藤佐智子. 2007. 前提条件操作の限界:「よろしかったでしょうか」の語用論分析 日本言語学会第135回大会予稿集.
- [6] Shudo, Sachiko and Yasunari Harada. 2009. Presupposition manipulation as a politeness strategy: politeness through ostensive inferential communication. 11th International Pragmatics Association Conference.
- [7] Sperber, Dan. and Deirdre Wilson. 1986. *Relevance: Communication and Cognition*. Cambridge, MA: Harvard University Press.

ⁱ 本研究は科学研究費補助金挑戦的萌芽研究:課題番号21652041『「場の言語学」の構築:場の意味論と語用論』に基づく研究の一部である。

ⁱⁱ この提案では、量的・計数的な分析をすることを目指していない。

ⁱⁱⁱ 前提操作が意図的であるか否かの問題は、前提操作がもたらすポライトネス効果と意図明示(‘ostension’ Sperber & Wilson 1986)の関係からは重要な論点であるが、紙面と時間の制約から本稿では割愛する。詳細はShudo & Harada (2009)。

^{iv} 詳細は、首藤 (2007)。

^v 詳細は、首藤 (2007)。